

昨年秋のイタセンパラ野生復帰後の状況報告

●昨年秋に淀川に放流したイタセンパラが産卵し、今春その仔稚魚の誕生が確認されました。

淀川への2度目のイタセンパラの野生復帰は、その産卵期である昨年(2011(平成23年))の秋に成魚500個体を放流しました。今年(2012(平成24年))5月に二枚貝から浮出するイタセンパラの仔稚魚の出現状況について調査した結果、放流場所付近でおよそ216個体の生息が確認されました(写真)。淀川での確認は2年ぶりとなります(図1)。

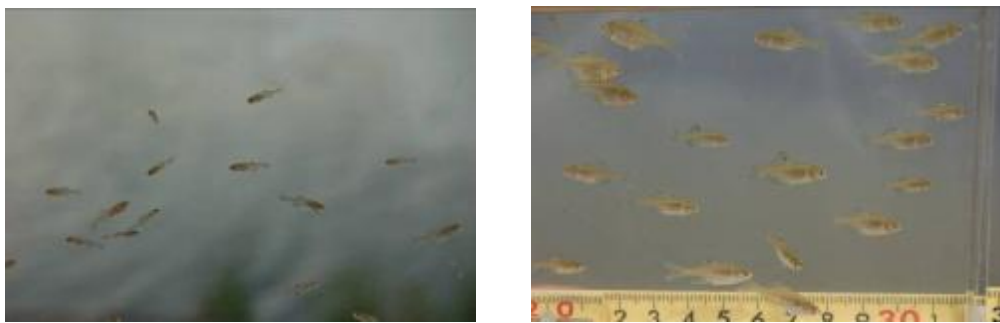


写真1 淀川で確認されたイタセンパラの仔稚魚(2012(平成24)年5月14日(左)、5月31日(右))

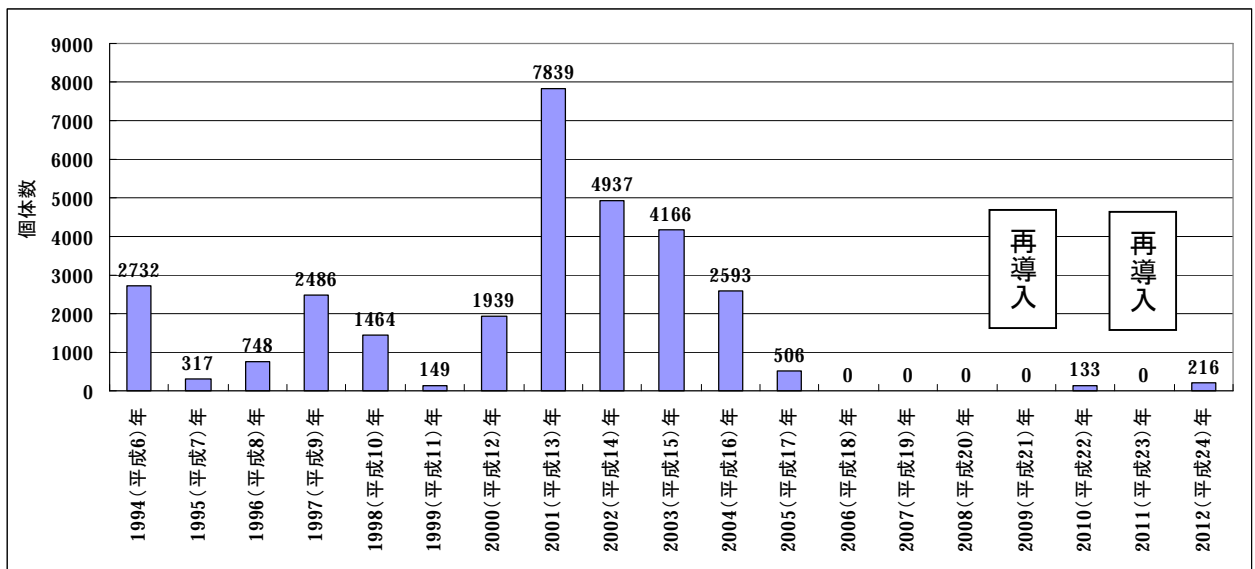


図1 淀川におけるイタセンパラ仔稚魚の確認個体数の経年変化

●前回(2009(平成21)年)の野生復帰では、放流直後および仔稚魚の浮出直後に大きな増水が発生し、イタセンパラの産卵母貝の流出・埋没や、遊泳力に乏しい仔稚魚が流出した可能性がありました。そのため、今回の放流前に環境改善すべく、大きな増水が発生してもイタセンパラなどが流出する可能性を小さくするように整備を行いました。その結果、再導入場所は、産卵期から6月中旬まで増水の大きな影響を受けることはありませんでした。

●確認されたイタセンパラの仔稚魚は、個体数が少ないながらも、順調に成育しており、秋には成熟・産卵し、生活史を全うする可能性があります。

イタセンパラの仔稚魚は、浮出を確認した当初の5月11日では全長1cm未満でしたが、稚魚が潜行していく時期の5月末には全長2cm前後にまで成長していることが確認できました(図2、図3)。ここまで成長すれば、遊泳力も十分に備わり、増水があっても元の水域付近にとどまる可能性があります。したがって、秋の産卵期まで順調に成長すれば、次世代の誕生が期待されます。それは野生で誕生した個体が生活史を全うすることであり、淀川のイタセンパラ復活に向けて大きく前進することとなります。

しかしながら、放流した個体数(500個体)に対して仔稚魚の個体数が半数程度であったことから、今後も野生復帰にむけた課題を検討していく必要があると考えています。

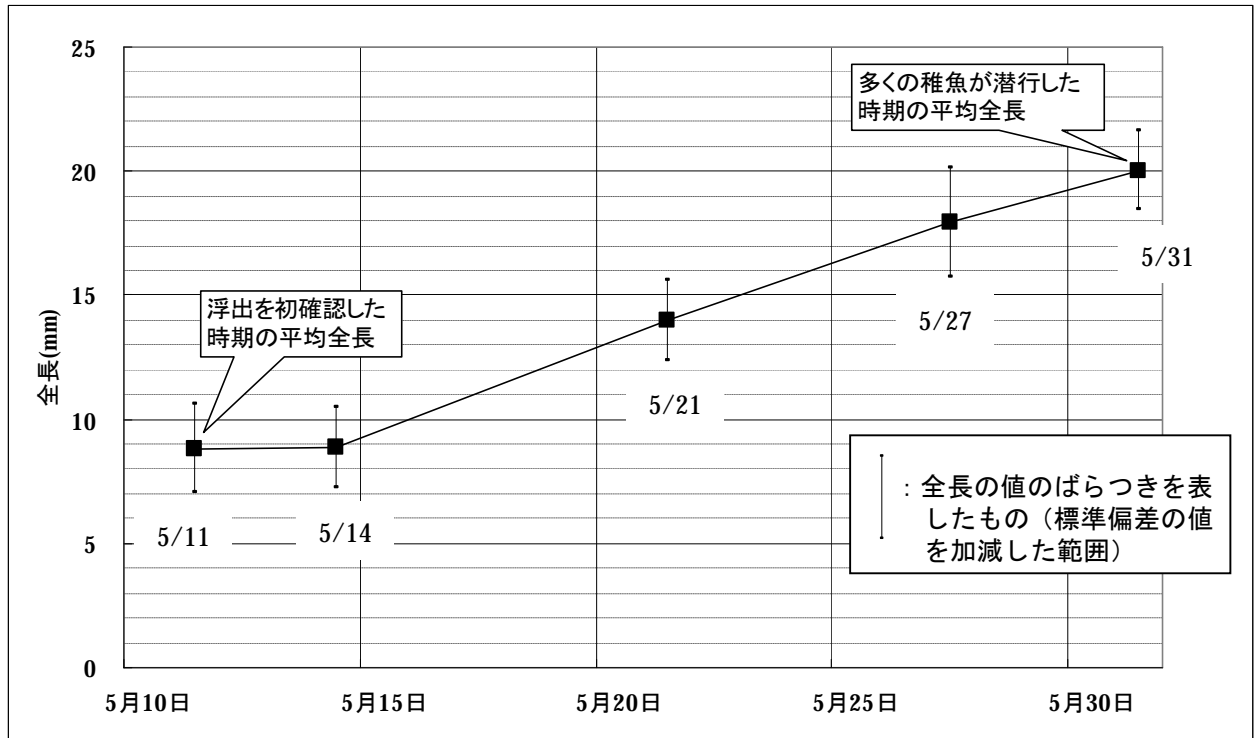


図2 イタセンパラ仔稚魚の平均全長の推移

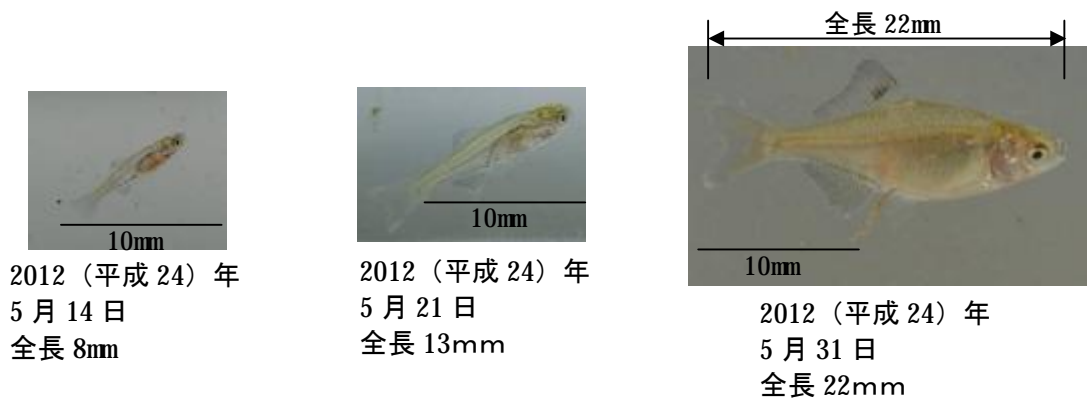


写真 2 イタセンパラ仔稚魚の大きさの推移